

第 2024 回定例研究会報告要旨（9 月 26 日）

民俗学の地域論

赤坂 憲雄

地域を指す用語も、また、時代により変遷してきた。

概して、第二次大戦以前は「郷土」、戦後は「地方」、そして 1980 年代以降は「地域」と言われている。明治以来、日本は国民国家・経済の近代化という路線の上を突き進んできたが、「地方」には、国家・中央の補完というニュアンスが含まれている。それに対して、「地域」には、五全総と同じように、東京一局集中を排して、地域の固有性を育成するといったイメージへと、ニュアンスが切り替わっている。はたして、国民国家を超えるための拠りどころとしての地域は可能か？

明治 30～40 年代において、市町村の合併が進められて、7 万余から 1 万余へと激減した。その副産物として、神社の合祀が行われ、全国の神社が靖国を頂点とする国家神道へと組み込まれた。そうした情勢のなかで、「郷土」の神社や文化財が捨てられていくのに対抗して、故郷の文化・精神を見直そうという思潮がわき上がる。それが、民俗学の形成へとつながっていく。今、平成の市町村合併が進み、そのなかで小町村の文化財が捨て去られるという、明治期と同じ現象が繰り返されつつある。その対策が必要である。

大都市集中・経済の近代化という潮流から脱け出る論理と対策は、現実を試みられてきたいろいろな理論や地域での実践を吟味・発掘して、探りあてる以外にない。

柳田国男は、都市と農村とを農産物を介して経済の循環するシステムとして捉えていた。それは、日本の都市と農村との関係のみならず、アジアのなかでの日本と他国との関係にも広がる、1 つの論理として成り立つだろう。

定住という生活スタイルが、今、山村や離島で崩れつつある。たとえば、山形県酒田市

の沖合にある飛島の住民は、漁や生活のしづらい冬期間は酒田市近辺に確保した住宅へ移り住む。山間農村でも同じような、デュアル・ライフをやっている例を見かける。縄文時代以来続いてきた定住から遊動・漂泊へと、生活スタイルの革命が起きている可能性もある。そうした生活スタイルを受け入れる、外に向けて多様に開かれた地域社会は可能か、その検証が必要である。

人と自然の関係が、西欧と日本では、根本的に違うのではないか、という気がする。日本では、住民の住む聚落－人工林の里山－原生的な奥山という構造のもとで、山間農村は存続している。ところが、森の国ドイツでは、シュヴルツヴァルトの黒い森でさえ、原生林ではない。自然は、全て人間に管理されている。ここにおいて、人間の自然環境との付き合い方や自然観が違ってくるのは当然だろう。

20 世紀は、国民国家・大都市集中が進んだ棄郷の時代だったが、21 世紀は地域のアイデンティティに拠る帰郷の時代へと転換する可能性がある。そこは、経済よりも、非経済的な発想が重視される社会である、と思われる。

講師紹介：東北工科大学教授。東北学を提唱、大学に常勤職をもたない在野の学者として有名であったが、1992 年に東北工科大学に奉職した。（フリー百科事典「ウィキペディア」）

日本思想、とくに柳田国男・折口信夫など民俗学の巨人たちが残したテキストの読み直しから、異人論・境界論・王権論などを幅広く論じてきた。その後、民俗学へ移行して、東北文化論を専門とするに至る（「はてなダイアリー」）

（文責：相川良彦）